

基調講演「^{あした}明日へのバトンをあなたに」

講師 永田 萌さん(イラストレーター・絵本作家)

(文責:(財)兵庫県青少年本部)

私は加西市で生まれ18歳まで過ごした後、絵の勉強をするために京都にある大学に入りました。卒業後、京都の会社に就職し、そして自分の作品を管理する会社を設立して社長となり、結婚し、母親にもなりました。今でも京都に拠点を構えています。

兵庫県の教育委員を8年間務め、昨年10月に任期を終えました。年が明けて改めて、私は一絵描きであることに、また、自分がなぜ生まれてきたのか、そしてどこへ行くのか、そのことを知るためにも絵を描くことが自分の仕事であるということに、思い至っています。

私と兵庫県青少年本部との大きな思い出は、「ひょうご兵庫青少年憲章」の草案を作るときの委員を務めたことです。誠実で真摯な意見が多く出る委員会でした。

インターネットに象徴されるような大きな社会の変化と同時に、阪神淡路大震災や酒鬼薔薇事件など、私たち兵庫は様々な試練を受けてきました。今思いますと、現在日本が抱えている、誰の手にも余るような問題の洗礼を、ある意味では一足先に兵庫は受けたのではないかと、という気がします。

だからこそ、この「ひょうご青少年憲章」では、私たちの心をはっきりと形にすることが大切である、同時に、私たちはこう思って社会の構築のためにそれぞれの仕事の場で誠実に取り組んできたということを経験した人達にバトンの形で渡したい、という思いが強くなりました。

憲章は1から6まであります。

(永田さんは、配布した「ひょうご青少年憲章」を参加者に紹介し、憲章1、5について、草案作成の過程での議論の様子やその時のご自身の意見、思いを話されました。)

10年近く前のことを昨日のように思い出しながら、改めて素晴らしい「ひょうご青少年憲章」であると思っています。兵庫に10年前からこれがあることを誇りたいと思います。

後半は、次のパネルディスカッションにつながるお話をいたします。

私の父は幸せな教員生活を全うして人生を終えましたが、父の一番の願いは、私が教師になることだったようです。ところが、私は、全くの教員一家に育ったために、「先生」と呼ばれる仕事だけには就かないと、小さいときから決めていました。

ところが2年前に母校の大学より先生になってほしいという依頼があったとき、一旦はお断りをしたのですが、恩師から、「これまでたくさん教えてもらったことを、自分のものだけにしたいんですか」と言われ、ハッとしました。お断りすれば、自分が受けたものを自

分の中だけに抱え込んでしまうことになる。それは余りにも一人よがりな恩知らずなこと。次の世代に受け継ぐことが今の私の役割ではないか、という気がして、私は永田先生になることを決心しました。

私の母校は、絵を描く生徒ばかりです。私は毎年最初の講義で、まず、ファンタジーとは何か、ということをお話します。そして、女生徒たちには、26歳で命を絶った詩人金子みすゞの、男子生徒たちには30代前半に結核で亡くなった中原中也の詩を渡します。それは、時を超えて生き残る本物の芸術とは何かということをお話して知ってもらいたいからです。そして、「あなたたちがもしその二人と同じ時代に生きていたら・・・」ということをお話させ、今の時代に生きることの感謝に気づいてもらうのです。その上で、6回の講義の最後には、生徒たちに中也とみすゞの、自分の心に一番深く響いた詩を選ばせて、その挿画を描かせます。しっかりとそれぞれの詩に向き合った生徒たちは、詩人が本当にうれしいと言ってくれるような絵を描こうと真剣になります。

私自身は父からも母からもたくさんのお話を教わり、たくさんの方から恩を受けました。恩を受けた方たちの多くはもうこの世にはいません。だからこそ、私は未来に返さなければいけないと思っています。私は絵を描く者として、絵を通して生徒たちに、そして未来に返していきたいと思っています。

誰にとっても、今ここに在るということは命の連鎖の一つです。生きてみなければ解らない自分なりの言葉が誰にもあります。子どもたちや青少年という未来を担う人達に勇気を持ってそのバトンを渡すことは、私たちの大切な役割なのではないかと思っています。今の子どもや若者は夢が持てない世代とよく言われますが、私たちが夢を語る大人であるならば、青少年たちも自ずと夢を持つことが出来るはずですよ。

私は、私のジャンルで若い才能が育ってくれることを一人の先輩として心から願っています。私に会えたことが生徒たちの人生のプラスの要因になってくれるとすれば、受けたものを未来に戻すという目に見える形の返し方ができる、という思いで教壇に立っています。「教える」ではなく「伝える」という気持ちで生徒に向き合うのはそういう理由からです。